地方は女性が元気にする

地方創生と女性のキャリアの新しい形

一度は東京に出たがUターンした。結婚を機に移住した。キャリアの壁に悩んだ女性たちが、地方に活路を見いだし、そういった女性たちによって地方が活性化している。ピンチをチャンスに変えた女性たちを追った。

昭和女子大学現代ビジネス研究所研究員　藤澤志穂子

離島経済新聞社代表理事・統括編集長の鯨本あつこさん。最近は、八丈島の復興の様子を見によく渡航する。家族や仲間の協力も得て、2人の子どもを育てながら全国を飛び回る

鯨本あつこさん(43) 離島経済新聞社代表理事・統括編集長

離島から地方の未来を学ぶ 移住者が増えた離島も

日本には1万4千以上の島々があるとされ、うち約420の離島では人が暮らし、その6割以上は人口500人未満、大半が九州や中国・四国地方の西日本に集中している。そんな離島の現状と可能性を伝えるフリーペーパー「季刊ritokei（リトケイ）」の統括編集長が鯨本あつこさん(43)。故郷の大分県日田市を拠点に2児を育てながら離島を飛び回り、自ら取材した深掘りのルポが毎号、掲載される。

最新の2026年春号では「生き残れる島の防災と関係人口を考える」と題した特集を組んだ。昨年10月に八丈島と青ケ島を襲った台風被害から、離島の防災を考える企画だ。「リトケイ」を、平時には島を伝える情報メディア、有事には島内外をつなぐ広域支援ネットワークとして機能させる仕組みを目指す。

「離島に興味を持つ人は一定数いると考えて2012年1月に創刊しました。メディアを中心に、島の人や島を応援したい個人や企業、自治体をつなぐプロジェクトを作ってきました。日本人にとって有人離島は人が住み文化的営みがあるうちが豊か。島を持続可能にする具体策の推進が喫緊のテーマ」。オンライン版もあるが、「紙の手触りを大事にしたい」と1万5千部を発行、全国1300カ所で無料配布、運営はサポーター会員による会費や寄付、広告やイベントなどの事業収入と、助成金で賄う。

3月中旬に東京・日本橋で開かれた離島交流イベントにも登壇した。島根・隠岐諸島、長崎・五島列島など五つの離島の観光関係者が集まり、各地の酒や料理を振る舞った。関係者からは島へ渡るための空路・海路の交通がどんどん減らされていく現状を憂える声が聞かれた。

「産業振興をしても、船が行かなくなったら人は住めない。大きな災害があったら、何もかも一瞬で消えてしまう。島を持続させるには産業振興だけではだめだと気が付きました。日本の排他的経済水域（EEZ）は世界6位という海洋国家。離島を守ることは国防にもつながります」

専門学校を卒業した後、福岡市や東京で地域情報誌の編集者や経済誌の広告制作を担当。東京で知り合った友人たちと過去、あまり取り上げられていなかったテーマを扱うメディアを作ろうと、広島県の大崎上島を訪ねた。柑橘類がたくさん実る、温暖でゆったりした時間の流れる島でその魅力にはまる。

「土地のおじさんから『この島は〝宝島〟なんだよと。朝起きたら誰かがタケノコを家の前に置いていった、なんてことが普通にある。それが本当の豊かさなんじゃないかなと」

移住者が増え、人口減少が下げ止まっている離島がいくつかある。隠岐諸島の海士町（中ノ島）、東京都下の利島など、産業振興や教育、雇用創出等、「その理由や共通項を分析して、島の経済をどう回していけばいいのかを考え、各地域に応用することも考えていきたい」。

photo　本人提供

尾畑留美子さん(60) 尾畑酒造専務

地方の酒造りを日本の成長産業に

新潟県・佐渡島で地酒「真野鶴」を醸す尾畑酒造。1892年創業と130年を超す歴史の中で5代目蔵元を務める尾畑留美子さん(60)は、東京の大学を卒業後、映画会社で働いた後、30歳を前にUターンした。家業を継いで、廃校を利用した学校で酒を醸す「学校蔵」を立ち上げるなど、既存の酒蔵の枠を超えて活躍の幅を広げている。

子どものころから酒蔵で遊び、日本酒が大好きで、利き酒は自慢の特技だった。だが後を継ぐのは「想定外」だった。先代の父が倒れ、実家を継いでいた姉夫婦が離れてしまったことで腹をくくる。当時はバブル経済、国内外の有名監督や俳優たちを相手にした日々は刺激的だったが、どこか物足りなさもあった。

「もし明日が人生最後の日になるならば、うちの酒蔵でうちのお酒を飲みたいと考えました。ちょうど地に足の着いた仕事、モノづくりがしたくなっていて、当時、雑誌編集者だった現在の夫が『一緒に酒を造ろう』とプロポーズしてくれたのにも背中を押されました。夫は今、酒蔵の社長で私が専務です」

2女を産み、夫婦で走ってきた酒造りで、「学校蔵」を提案したのは夫の健さんだった。渋々見に行った廃校の校庭から眺めた、海に沈む夕日の美しさに佐渡の魅力を再発見し、決断する。2014年にスタート、国の天然記念物であるトキの生態に配慮して造られた酒米を使い、太陽光発電を活用した資源循環型の酒造りは徐々に軌道に乗る。酒造り体験プログラムには国内外から参加者が集まり、年1回の「特別授業」では地域エコノミストの藻谷浩介さんらを招き、地域の課題をワークショップ方式で学ぶ。

佐渡にはユネスコの世界文化遺産に登録された金山があり、その豊かさから酒蔵が栄えた。「地方こそ活躍の場がある。人が少ない分、何でもやれる『余白』がたくさんある。金山の歴史に豊かな自然と食

材と、素材はいっぱいあるから、来てくれた人が『これだ』と感じたことで起業して、面白い島にしていってほしい」

日本酒の国内需要は減少傾向で、インバウンド需要や海外輸出は増えているものの、市場の縮小に歯止めがかからない。

「ただコロナ禍を経て『多様性』を受け入れる業界になってきたと感じます。世代交代し、斬新な酒造りに挑む酒蔵も増えました」

昨春、東京で働いていた長女が「後を継ぐ」と、IT企業社員の夫を連れて佐渡に戻ってきた。ちょうど初孫の男の子が生まれたばかりだ。

地方の酒造りが日本ならではの成長産業になればと期待する。「娘と婿がどんな酒造りをしてくれるのか。100年の歴史に今の風を乗せた味わいを生み出してほしい。年齢的に自分が『踊り場』にいるような、ちょっと複雑な思いも最近はしています」と笑った。

尾畑酒造専務の尾畑留美子さん。「今は全く見えないけれど、物凄く期待しています。世代は変わる」と次世代に期待する

牛来千鶴さん(63) ソアラサービス社長

「あったらいいな」を進化 途上国の女性も支援

広島市中区、路面電車の駅からほど近いシェアオフィス「SO@R（ソアラ）ビジネスポート」では、定期的にネットワーキング交流会を行っている。入居するクリエイターや起業家のほか、外部からの参加も自由で、ワインやつまみを片手に語り合う。初対面同士を引き合わせ、話を弾ませてくれるのが、運営会社ソアラサービス社長の牛来千鶴さん(63)だ。

「在宅ワークも増えてシェアオフィスの入居者は以前ほど多くはありません。でも交流会は相変わらずの人気です」

「SO@R」という名前には、「SOHO」（スモール・オフィス、ホーム・オフィス）を支援し、引き上げていこうという願いをこめた。2001年にスタートし、広島県内の大手銀行や電鉄会社などの出資を得て、事業を拡大。創業10年で年商は3億円を超えるまで成長し、西日本の女性起業家の先駆者として、政府や自治体の審議委員などを歴任してきた。現在は経済産業省が取り組む、全国の女性起業家支援ネットワーク「ジラフス・ジャパン」で中国地方を担当している。

山口県出身の牛来さんは短大卒業後、出版社に勤めたが結婚、出産で退職。専業主婦として6年間を過ごし、下の子どもが幼稚園に入る頃に広島市で企画会社に入社。だが「何だか〝モヤモヤ感〟に襲われて。悩んだ末、自分は経営者になって、何か新しいことを始めたいのだと気が付いて」。

「販売促進プランナー」の肩書で、自宅の一室で仕事を始める。

「でも、鬱々として(笑)。私みたいに家で一人で、情報もなくモヤモヤしている人たちはたくさんいるはず。そんな人たちが気軽に会って本音で語り元気になれる会を作りたいとひらめきました」

2016年には新機軸として、新たに広島から平和をアピールするグッズブランド「EARTH Hiroshima」を立ち上げる。原爆ドームなどに寄贈される多数の折り鶴を再生紙として利用、折り鶴のイヤリングなどアクセサリーや文具として販売している。広島の製造業300社が参画。世界に通用するブランドを目指している。

提携先は海外にも広がる。第1弾として、コスタリカのバナナの樹皮を使った母の日用のカーネーションの造花の取り扱いを4月から始めた。JICA（国際協力機構）の支援を得て現地を視察、デザイナーのエリザベスさんを知り、意気投合した。

開発途上国の女性たちの自立を促す国際プロジェクトの一環で、今後もこうしたエシカル商品を手がけていきたいという。

「そろそろ社長業は若手に任せて、私は国内外を飛び回って新しいビジネスの種を見つけては持ち帰るようにしたい」

ソアラサービス社長の牛来千鶴さん。次世代への承継も考えはじめている

坪内知佳さん(39) GHIBLI社長

漁業の六次産業化を全国の在宅女性が支える

群れの中から突出して新しいことをする「ファーストペンギン」が漁業で実践、テレビドラマのモデルにもなったのが坪内知佳さん（39）、山口県萩市に拠点を持つ企画会社GHIBLI（ギブリ）の社長だ。20代前半で結婚、出産、離婚を経験して、シングルマザーで仕事を探し、たまたま知り合った漁師に、先行き不透明な漁業を何とかしてほしいと頼まれる。コンサル業はもちろん未経験。

「ただ魚にはこだわりがありました。生まれつき化学物質の消化酵素が少ない体で、息子も食物アレルギーもち。食べられるものがないって、生きてはいけないと言われているような気持ちになるんです。最後の一匹、一切れになっても欲しいものが買える世の中を実現したいと思いました」

港の水揚げの中、低価格で取引されるか、放置されている無名の魚があるのに気が付いた。美味しいのにもったいない、何とかできないかと、2011年に「船団丸」の事業を始めた。主力の魚を市場に出し、その他の鮮魚を特殊な手当てをして梱包、箱詰めをして消費者に届ける。一次産業である漁業を、加工（二次）や販売・サービス（三次）と「六次産業化」することで付加価値を付けた。今は加工品も含め、取り扱い先は北海道、福島県、長崎県、愛媛県など全国15カ所に広がった。

事業は多岐にわたっている。マグロのアラを魚粉にし、砕いた貝殻を畑の土壌に混ぜる事業のほか、規格外のパールをアクセサリーに加工販売、漁の世界を体験するスタディーツアーなど。

「いろんな相談事を受けているうちにそうなりました。漁師の皆さんとは派手な喧嘩もしたけれど今は分かり合える。日本の和食、刺し盛りの美味しい文化を守りたい」

坪内さんは福井県出身、キャビンアテンダントを目指し大学で英語を専攻、留学もしたが病気で断念、20歳で結婚した相手の勤務地だった山口県萩市に移り住んだ。

中小企業庁の地域課題解決事業推進（ゼブラ企業）にも選定され、カツオ漁で知られる和歌山県すさみ町をモデルにした漁村の自立システムの実現にも取り組む。

社員は女性14人、北海道から沖縄まで全国に散らばり、在宅・リモートワークをしている。

「授乳しながらメールを返し、オンライン会議に出る社員もいる。どんな環境であれ、各人が最大限の力を発揮して生産性を上げることはできます」

実は最近、現在のパートナーとの間に授かった3人目の子どもをおなかの中で失った。

「女性経営者が子どもを持つなんて、という批判もあるかもしれない。でもチャンスがあるなら産むべきだし、社員全員で快くバックアップしてくれました」

社名のGHIBLIとは、サハラ砂漠から地中海へ吹き下ろす「熱い風」の意味のイタリア語。取り組みが「熱い風」となって広がっている。

群れの中から突出して新しいことをする「ファーストペンギン」を漁業で実践、テレビドラマのモデルにもなった坪内知佳さん

photo 尾畑酒造提供(上)

photo ©GHIBLI